

ま え が き

文教大学教育研究所

所長 平 沢 茂

以前にも書いたことだが、教育研究所は設立当初から、FD、特に授業改善に関する様々な取り組みを行ってきた。ことに、学内教員の様々な授業を、自己紹介してもらう冊子シリーズ『文教大学の授業』は、これまでに第31号までの刊行を重ね、その第25号までを合冊として刊行した（注1）。

この取り組みをさらに進めるために、2007年度からは、授業改善を推進する方法を模索するために、研究所内に新たなプロジェクトを立ち上げた。

初年度は、大学のFDの現状を幅広く把握し、その内容を検討するとともに、広く学内の教職員に紹介した（注2）。その検討の中で、授業改善のためには、授業公開も重要ではないかとの結論を得、2年目は、本学における授業公開の可能性を探った（注3）。局所的な授業公開に留まったものの、ご協力いただいた教員からは、その意義を認める意見が出され、この路線を進めることの重要性が確認された。

3年度目となる本年度は、公開する授業をさらに増やした試みに取り組もうということになった。本研究所研修部主任・教育学部准教授／米津先生のご尽力で、11/9（月）～11/13（金）の5日間にわたり、計17の授業を公開することができた。

本学は、2つのキャンパスに分かれており、そのうち、本研究所のある越ヶ谷キャンパスには、3つの学部がある。教育学部、人間科学部、文学部である。これらの学部から研究に賛同してくれる教員を募った結果、本報告書4頁所収のプログラムが固まり、予定どおりに実施することができた。最終日には、ご協力いただいた教員参加の研究協議会を開催し、大学における授業改善に関する意見交換を行った。

本報告書は、この事業の報告書である。授業を公開してくださった先生方に寄稿をお願いしたところ、9人の先生から玉稿を頂戴することができた。

もちろん課題は多い（報告書の最終部分に記述）。最大の課題は、研究所主催の研究活動の一環としての授業公開の試みであり、参加はあくまでも教員の自由意志によって

いるという点である。したがって、公開の広報はしたものの、授業を参観する教職員は「予想どおり」少なかったという点である。

言うまでもなく授業公開は、参観者がいなければその意味は小さなものになる。最終部分で記述するように授業担当者にとっては、参観者がゼロであっても、全く無意味な試みであったはずはない。しかし、今後の授業改善の進め方については、大学当局が主体となった取り組みが不可欠のようである。

繰り返すが、今回の試みは、本研究所主催の研究活動の一環としての授業公開であった。授業改善に関して研究所ができることは、研究的な活動を通じての教員への情報発信に留まる。授業公開による教員の授業改善を進めようとするなら、大学を挙げての活動は不可欠である。

当然ながら、今回の授業公開にご協力いただいた先生、さらにこの報告書に寄稿してくださった先生は、みな授業改善に関する意識が高い。だからということはあるにせよ、この報告書をお読みいただくと、授業公開の意義は自ずと読み取っていただけるものと考えている。この報告書が、本学のFD、特に授業改善に関する次のステップに踏み出す契機となることが、本研究所スタッフの望みである。お役立ていただけることを望むや切である。

最後に、この試みに賛同してご参加いただいた先生方、また、これを進めてくださった研究所スタッフに心より感謝申し上げたい。

なお、本報告書では、予算の関係で特にお申し出のあった授業を除き、授業中に配布された学生向けの資料等を割愛させていただいた。学生のために様々な資料を作成していただいた先生方に掲載できなかったことをお詫びしたい。

(注1) 文教大学研究所編『文教大学の授業/第1号～第25号合冊』2008年12月

(注2) 同編『大学におけるFDの動向—事例分析を中心に—』2008年2月

(注3) 同編『大学におけるFDの動向—本学での取り組みを中心に—』2009年2月